

親子のための古代入門教室の実施

2012年7月27日と31日に「親子のための奈文研たんけんツアー」を催しました。平城地区は深澤副所長が、藤原地区は杉山副部長が案内人となり、夏休みを利用した子どもたちとともに、平城宮、藤原宮の復原建物や発掘現場、それに各整理室を回りました。当日は、猛烈な暑さにみまわれましたが、子どもたちは、普段はなかなか見られない作業の様子や遺物を真剣に見学していて、中でも木簡の見学では、研究員の説明をよそに、自分が読める字があることに嬉々としている子どもたちの姿が印象的でした。平城地区でおこなわれた拓本体験では、瓦整理室の拓本隊の指導のもと、子どもたち全員が見事な拓本を完成させました。出来あがった拓本は、きっと宝物となったことでしょう。

また、8月8日には、「親子のための古代体験—植物で美しい色を染めよう」に、「染司よしおか」(京都)の吉岡更紗さんをお招きし、藍染体験を実施しました。素材に使ったのは、副所長が丹精込めて育てた蓼藍たであい。これを1時間ほど手揉みし、漉して、布に色付けするという手間のかかる方法でしたが、布は美しい藍色に染まり、出来映えは古代人顔負けのものとなりました。

本企画は、これからの文化財保護の担い手である子どもたちに文化財に興味を持ってもらおうと開催したのですが、拓本や藍染めに夢中になっている子どもたちの姿、完成したときの笑顔を見るに、この主旨は十分に果たされたのではないでしょう。

(都城発掘調査部 芝 康次郎)



藍染め体験の一コマ(右端は吉岡更紗さん)

西トップ遺跡の解体修理開始

奈良文化財研究所は1993年より長きにわたってカンボジア・アンコール遺跡群の調査研究に携わってきました。2002年からは西トップ遺跡と呼ばれる石造寺院を継続的に調査してきましたが、研究を進めるうちに、この遺跡が崩壊の危機に瀕していることがわかってきました。おりしも2008年には建物の一部が崩落。その危機は目のあたりのものとなりました。

ひとまず応急処置としてスチール製の足場によって建物を補強したものの、根本的に修理するにはいったん建物の石材をクレーンで解体し、基礎を強化したうえで再構築する必要があることがわかりました。しかし、これはあくまでも文化財の修理です。コンクリートなどの現代的な素材を使用するのは極力ひかえ、もとあった石材を再利用し、なるべく建造当時の技術を用いて再構築する必要があります。そのためには、修理前の遺跡の現状を詳細に記録し、ふさわしい解体修理の方法を検討せねばなりません。それには3年あまりの時間を要しました。

そうした学術的な記録と検討を経て、昨年末に修理計画書をカンボジア政府(APSARA機構)とユネスコの委員会(ICC-Angkor)に提出。その承認を経て、いよいよ今年3月に解体修理工事が着工しました。起工式では難波企画調整部長(所長代理)とAPSARA機構のマオ・ロア局長がスピーチをおこない、両国の機関が手をたずさえてこの貴重な文化遺産の復興をおこなっていくことが表明されました。

今日も現地では奈文研の現地駐在員・現地スタッフおよび石工・作業員など10数名によるチームで工事が進められています。(企画調整部 石村 智)



クレーンによる崩れかかった建物の解体修理